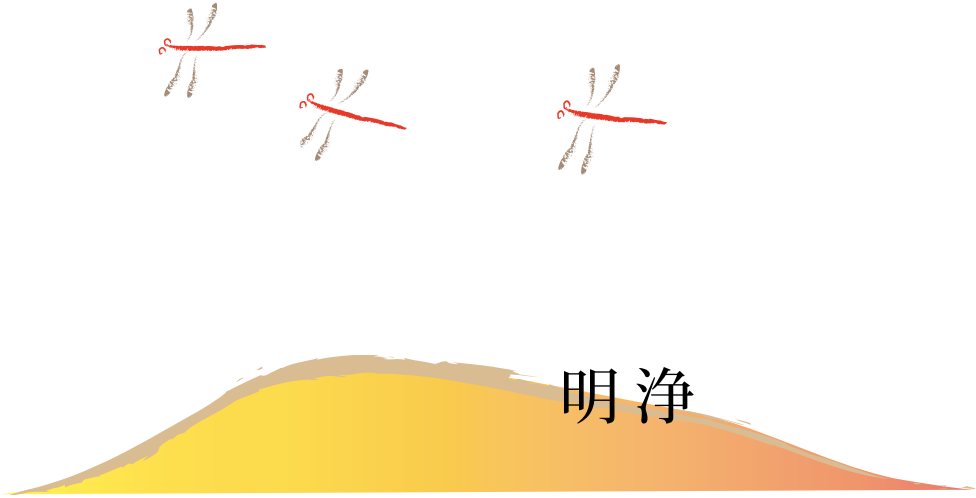
明浄
2013
第12号

KAN 環

千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2013年10月



山水画家郭熙の画論「臥遊録」より
秋山　明浄にして粧うが如く

早朝の田園風景
冷え込んだ朝、稲刈りが終った田園は朝陽を浴び、台地一面に水蒸気が立ち昇る。遥か烏帽子の上空、黄金に染まった雲間からもれる陽光に祈る。
「今日も良い一日でありますように」
電車は塩田平を駆けぬける。　　表紙写真・文　矢幡正夫

contents

4　躍働　バリューブックス代表取締役　中村大樹さん
---------- 伊藤文子

7　信濃の美術館を歩く
水村喜一郎美術館　東御市に開館しました ---------- 海野郁

11　波紋　新刊紹介 嶋田貴美子著『流転』全３巻 ---------- はな

12　連載　ラ・マンチャの白い風 「世界一小さな村」------ 桜田義文

15　千曲川地域の芸術家を訪ねる
美術家・肖像画家　杉村俊明さん ---------- 吉池みどり

18　観点 「東京オリンピックと上田」---------- 岡田基幸

20　寄稿 「忘却のえびす講物語（３）」---------- 清水たか子

22　あとがき

フロンティア躍働

バリューブックス代表取締役

中村大樹さん

10年ほど前から、高度資本主義に疑問を持ち、自分の生活や働き方を見直す人が増えてきた。２０１１年の東日本大震災の後、その傾向が強まったといわれる。農業や漁業を志す、職人の世界に入る、起業する、など。

バリューブックス代表取締役の中村大樹さん（30歳　長野県千曲市出身）もそんなひとりだ。株式会社バリューブックスは、古本を買い取ってインターネットだけで販売する古本業者である。２００７年に創業、本社は東京都内に置いているが、買い取りセンター兼倉庫は上田市秋和と岡にある。現在、従業員80名、在庫数50万冊、全国から送られてくる本は一日８０００冊。

「最初はひとりで始めた」という中村さんにこれまでの経緯などを

聞いた。

Q　創業のきっかけをおしえてください。

大学を卒業して進路に迷っていたとき、大学時代に買い集めた本を試しにインターネットオークションにかけてみました。思いのほか、売れたのです。「古本でも売れるんだ」ということが実感としてわかり、インターネット販売を続けました。２００７年買い取りサイトを開き、古本の購入も始めました。同年、高校の同級生だった４人に声をかけて、バリューブックスを創業しました。現在４人は良きパートナーとなっています。

Q　インターネット販売のシステムを説明していただけますか？

全国のお客様から古本をお送りいただき、一冊一冊を自社開発の査定システムを使って査定します。査定結果をお客様にメールで連絡し、取引が成立します。一方、ネットで購入注文を受け、全国へ販売します。毎日５０００冊ほど販売しています。

Q　ひとりから創められた仕事を、６年にしてこれだけの規模の会社に育て上げられました。素晴らしいですね。

少しずつ少しずつ、という感じでした。自分の思いつきで始めたことが、本業になるとは思っていなかったので自分でも驚いています。それと、人に恵まれました。高校のときの先生には創業以来何かと指導してもらっています。相談できる仲間もいます。

バリューブックスは東日本大震災の直後、毎月1回キャラバンに本を積んで釜石市に届け、被災者に喜ばれた。２０１２年からは古本を通して陸前高田市を支援している。不要になった本を募り、買い取り相当額を同市の図書館再建資金として寄付している。これまでの寄付額は１４００万円にも上る。

また、販売できないきれいな本を福祉施設や病院に配布している。さらに一般の企業や学校で不要になった本を寄付してもらい、買い取る場合の価格に相当する額を企業側の指定したＮＰＯ法人などに、企業名で寄付をする事業も展開している。現在、提携ＮＰＯは30団体、提携大学は12校に及ぶ。

Ｑ　ＣＳＲ（企業の社会的責任）の制度はあっても実行していない企業が多いと聞きます。中村さんの会社は社会貢献活動に力を入れてらっしゃいますね。

査定で値がつかない本を有効活用したかったのです。きれいな本を廃棄処分するのはもったいないですからね。送り主のお客さんからも捨ててほしくないという要望がありました。それで、「ブックギフトプロジェクト」と称して、老人ホームや病院の待合室、学童保育所など48団体に送っています。

Ｑ　最後に抱負を聞かせてください。

現在、インターン生をふたり受け入れています。６週間の予定ですが、この機会に彼らと一緒に、本で上田の街を盛り上げるプロジェクトを実施したいと思っています。カフェなどに本を置き、だれでも気軽に本に親しむことのできる環境を築いていけたらいいな、と考えています。本を通して上田の魅力アップにつながれば嬉しいです。

若い社員が多いバリューブックスは、次から次へと編み出されるアイデアで弾んでいる。活き活きとした社内環境、そして全国に拡がる絆、そのトップに立つ中村さんに気負いは見られない。笑顔がとても爽やかだ。中村さんは週末サッカーを楽しむスポーツマンでもあり、まさにクールなフロンティアである。

平成25年8月20日訪問　伊藤文子

信濃の美術館を歩く

水村喜一郎美術館

～東御市に開館しました～

5月、信州にまた個人美術館誕生のうれしいニュースが流れた。東御市の海野宿近く、千曲川河畔に建つ水村喜一郎美術館だ。開館記念として、「絵を描くことは生きること　水村喜一郎個展」が、11月30日まで開催されている。

開館当初に訪れたとき、画家が生れ育った東京の下町や運河の風景に、どこか温かさと懐かしさを覚えた。小学校から高校までの作品、静物や人物画などのコーナーもじっくりと味わいたい空間だ。約60点が展示されている。

8月下旬には、軽井沢でご静養中の天皇皇后両陛下が美術館を訪問された。30年前、展覧会で水村さんの作品をご覧になったご夫妻が、御所に招かれて作品を注文されている。

水村喜一郎さん（67歳）は、9歳のときに高圧線に触れ両腕をなくした。それ以前から絵を描くことが好きで、事故後は絵筆を口にくわえて描き、画家の道に進んだ。若いころから展覧会に出品を重ね、信濃デッサン館や全国各地で個展を開催している。

ご自宅は千葉だが、美術館にはアトリエを併設、制作に励まれる。約束の時間に伺うと、画家ご本人が「お待ちしていました」と出迎えてくださった。

Q　東御市での生活はいかがでしょう。

住めば都で、どこにいても同じです。信濃デッサン館の窪島さんとは東京の頃からの知り合いで、東信地区にはもう30年近く来ていますしね。絵を描くことは孤独な作業で、人に会いたくなるんです。年中旅に出て、風景や人と出会ってきました。今はなるべくここにいるようにしていますがね。

Q　美術館を建てることは前から考えていらしたのですか。

8年程前、梅野記念絵画館で個展を開いたのですが、その当時館長だった梅野隆さんに東御市に美術館を建てないかとすすめられたんです。窪島さんなどにも支えられ、こうして開館することができました。

Q　画家をめざしたきっかけは？

子どものころから絵を描くのが好きでしたが、決められた絵を描かせられる学校の授業はきらいでしたね。描きたくて描きたくてたまらないものを描いてきました。

20歳のときには画家になろうと決めていました。高校の頃から、絵を売ったりしながら自分でお金の工面をしていましたから。ただ、入学金を出してくれた先生や、1

年に何枚か絵を描くことを条件に援助してくれたドイツ人もいましたけれどね。

私は東京の下町で、安普請の長屋が並ぶ特異な環境で育ったんです。父はとび職の親方で、出入りする職人たちは脛に傷を持つものばかり。こうした情けない人生は送るまいと思いましたね。長男の私は当然父の後を継がなければならなかったのですが、腕を無くしたことで絵描きになれたんです。

Q　それでも画家になるまでにはご苦労があったのでは……。

腕が無いことで辛い思いをした記憶は全くないです。ケンカで負けた記憶もなく、大通りをかっぽしてましたよ（笑）。とにかく子供の頃からやりたいことがいっぱいで、朝起きると今日は何をしようかとワクワクしてました。知らない人ともすぐに仲良くなれましたしね。

（最近、私の知人が水村さんの大学の後輩だったことが判明。水村さんの周りには常に人が集まっていたそうだ。）

Q　影響を受けた画家はいらっしゃいますか。

好きな画家は佐伯祐三や長谷川利行などですね。それから恩師の*洲之内徹さんには、「人と違うものを表わさなくてはならない……。それを持続できるのがいい画家だ」と言われました。

*洲之内徹・画廊主、小説家、エッセイスト。『気まぐれ美術館』の筆者として名高い。

Q　素人の見方で失礼ですが、子どもの頃から現在まで、画風があまり変わっていないように思えるのですが。

ずっと淡々とわが道を歩いてきました。茶系の絵が多いのは絵の具が安かったから。それが自然と作風になっていったんです。若いころの絵には力があります。青春の思いがつまった絵にまけない絵をこ

れからも描き続けたいですね。

～・～・～・～・～

小学校から高校までの作品を集めた部屋に、ひと際目をひく２点がある。

高校生だった水村さんは、毎朝父が飼っていた軍鶏の世話をしていた。ある日、酔っぱらった職人たちが軍鶏を追い回し、捕まえて首をひねり吊るしてしまった。哀れに思った水村さんは食べる前にと、一気に描きあげる。『吊るされた軍鶏』だ。

『旧いストーブ』は、耐震構造でなかったため捨てられることになった、愛用の赤いストーブを描いたもの。

他にも、阪神大震災後の神戸で出会った『取り残されたアパート』など、作品それぞれに水村さんの優しさと熱い思いがこめられている。初めて作品を見た時に感じた、温かさと懐かしさの秘密がわかった気がした。

美術館では、運が良ければ画家本人にお逢いして、その思いを聞くことができます。

平成25年８月７日訪問　海野　郁

『取り残されたアパート』

水村喜一郎美術館

◇入館料

一般４００円、シニア（65 歳以上）３００円、小中学生無料

◇開館時間

10 時～ 17 時（本年度は 11 月 30 日まで。冬期休館）

◇休館日

毎週月曜日（祝日の場合、翌火曜日）

◇所在地

〒 389-0518　東御市本海野 645　　℡ .0268-71-5242

波紋

新刊紹介・嶋田貴美子著『流転』全３巻

『環』４号から７号にかけてエッセイを連載した嶋田貴美子さんが、長篇小説『流転』全３巻を出版した。白地に赤の斬新な装丁は、長野大学教授でデザイン科学を専門とする禹 在勇（うざいゆう）さんによる。主人公辰治のモデルとなったのは嶋田さんの父親である。

静岡の貧しい鍛冶屋に生まれた辰治は、幼い頃に母を亡くす。日々の食糧にも事欠く中、長男として家族を思いやり、貧しさからの脱却を夢見て成長していく。

10 歳で奉公に出された辰治は、そこでの生活に満足できずに夜逃げをする。が、運よく農家に住み込んで養蚕と出会う。その後、養蚕の指導員を目指して上田の蚕業学校に入学。念願かなって養蚕指導員として成功した辰治は、旧家の娘との身分違いの恋も成就、故郷に帰って一家をなす。当時としては珍しく、子どもたちをみな大学に行かせるまでになっていた。

嶋田さんは、父親が一時暮らした上田に、夫の転勤で移り住んで現在に至っている。強い縁を感じた嶋田さんは、いまも残る養蚕関連の施設を見学、資料を読むなどして執筆した。農家での養蚕の様子は、作者自身が経験したかのような臨場感あふれる描写となっている。

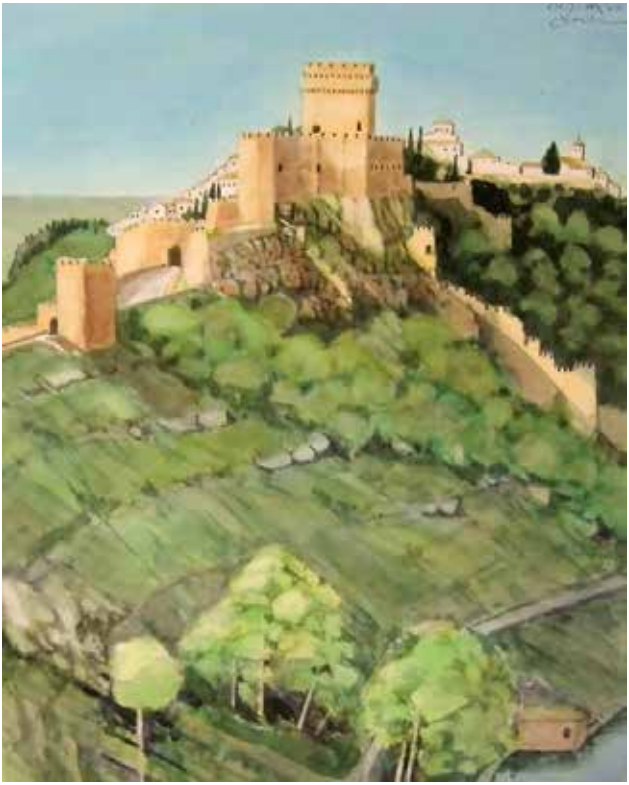
末っ子だった嶋田さんは、フィクションをまじえながら、波瀾に満ちた父の人生を小説として結実させた。そこにはまた、人としての在りようについて、作者の思いのたけが吐露されている。（はな）

（『流転』全３巻は、エコールの各図書館に寄贈されました）

連載

ラ・マンチャの白い風

桜田義文



スペイン　アラルコン城にて
水彩画　10号　桜田義文

世界一小さな村

前回ご紹介したフカール渓谷の約百キロ上流に世界一小さな村アラルコンがある。

村の人口は百八十二人、ところがこの小さな村に四つ星ホテルが二軒あって、毎日村の人口以上の観光客が世界中からこのホテルに来る。そして教会が四軒ある。そのほかはバールとパン屋が一軒ずつ、もちろん村役場もある。これで目立つ建物はおわり。

城と教会と住宅は三方をフカール渓谷に囲まれた狭い山の上に密集している。ラマンチャの荒野とつながる東側の狭い尾根の上に、城への路と三つの城門がある。第一の門は平原のはずれに見張り塔とそれに続く城壁と一体となってある。こ

こでまずゆっくりとアラルコンの城と村のすべてを眺めるのがいい。かつて二十年ほど前スペインに居る弟を訪ね、前日に問い合わせをしたら奇跡的にこのパラドール（国営ホテル）の予約が取れ、弟のボロ車でかけつけた時にも、この見張り塔の下でゆっくりとこの景色を見た。なんの予備知識もなく初めての景色であったはずが、なぜかどこかで見た景色に思えてきた。記憶の糸を手繰っていくと、中学生のころ部屋に張り付けてあった二枚の切り抜きにたどりついた。一枚はフランドル派の水辺の風景画であり、もう一枚がこのアラルコンの城の写真であった。こんなに美しい城が世界のどこかに在るのだ、と長い間飾っておいた記憶がある。そのまさにあこがれの風景が目の前にあって、これからこの城に泊るのだという現実が信じられない感動として何時もここに立つと思いだす。

フカール渓谷は深さ二〇〇メートルほどあり、急な崖とその上にある岩山に守られた天然の要塞である。

この城は七世紀にスペインを支配した、イスラム教徒のムーア人によって築かれた。イスラム建築は外側にけっして華美な装飾をしないという大きな特色がある。のちに十二世紀になってこのお城はレコンキスタ（国土回復戦争）のなかでキリスト教徒が落とし，この城の外壁にいくつもの窓を開けたりしたため当初のイスラム様式は失われたといわれるが、それでも塔の部分の小さな風穴やアーチ型の門やパティオとよばれる中庭などにイスラムの特色が残っている。

この城は現在パラドールになっていて、運がよければ七世紀のお城に宿泊できる。でも十三室しかないため、スペインで最も予約が困難なホテルとしても有名である。

おすすめは塔の三階の部屋、天蓋付きのベッドはまるで貴族になったようである。しかしこの部屋は幽霊が出るともいわれている。西暦一一八四年、イスラムの最後の王様 El Cidego（盲人）がこの部屋で悲惨な最期をとげたというのだ。そのためかこの部屋に泊まると、夜異常な物音で起こされ、金縛りになったなどという体験者がいるというのだ。一三〇〇年ものあいだ血を吸ったり、汗を吸ったりしてきたのだから仕方ないことで、むしろ幸運とおもったほうがいい。

屋上にあがってみると深いフカール渓谷の向こうに驚くほど明るいラマンチャの平原が光っている。地

平線まで続くこの大地をおさめていたキリスト教徒ビジューナ伯爵は、一五世紀にイザベル女王にうとまれ、この城に幽閉された。そのためこのパラドールは別名をビジューナ伯爵のパラドールともいう。そのころこの村には一万二千人もの住民がいたという。

過疎の村なのだが、どこかの国のようにアメとムチの合併などということは考えないようだ。国民とその一番近くにある自治体がおろそかにされるような国の在り方はどこか間違っているのではないだろうか。

化石のようなアラルコンではあるが、私はこの村が大好きで、ラマンチャの放浪の旅に疲れると、この村に来てパラドールでランチを食べたり、バールでコーヒーを飲んだりして数時間を過ごす。そんなとき、私たちが当たり前と思っている、成長とか発展とか繁栄などというものがはたして人間らしく生きることにどんな意味があるのだろうとふと考えてしまう。いつのまにか憲法改正やら軍隊やらが、かつてはひそやかに遠慮しながらさやかれていたのに、いまや大きな顔をして現れてきたこの国の向いている方向は、どうも私とは違うような気がする。国はちょっと離れて周辺からみると、ことの本質がみえたりするものだ。

おもしろWeb

コンテスト情報「登竜門」

http://compe.japandesign.ne.jp/

日本から参加できるコンテスト（コンペ、公募、コンテスト、賞等）情報を網羅することを目指して 1997 年から運用を開始。紹介する記事はすべて主催者に直接確認を取った上で掲載している。
企画によって、参加条件に様々な同意事項（権利規定等）があるので、自分の責任で参加してください。

美術家・肖像画家

杉村俊明さん

北国街道と上州街道の分岐点（今の上田市房山町辺り）から上州街道方面に数百メートル行くと「上州街道川原柳通り」の道標が見えてくる。真田昌幸公時代は沼田城との重要な道であった。その道標のある家が1993年上田市の景観賞を受賞した杉村さんこだわりの館だ。

杉村さんは子供のころから絵描

きになろうと決めていた。敗戦の年に生まれ、物のない時代だったがケント紙の切れ端で絵遊びをした。武蔵野美大で絵画・デザインを学び、大学卒業後は企業で広報宣伝の企画制作を担当し、新聞広告からカタログ・展示会にも力を注いだ。信毎広告最優秀賞等も受賞したことがある。

美術活動は、具象・抽象・シュルレアリスム（超現実主義）、シンボリズム（象徴主義）、オブジェ（立体物）、ハプニング（パフォマンス＝造形芸術と演劇の中間に位置、一定の環境の中で参加者が自然もしくは指示反応する行為）、インスタレーション・アート（設置芸術）、メール・アート（郵便利用）、ミニマル・アート（最小限芸術）、コンセプチャル・アート（概念美術）、路上観察（写真）等、自由に多様な表現をしてきた。

「創造する世界を表現する時と肖像画を制作の場合とでは取り組む姿勢がちがうのでは」とお聞きしてみた。「新しいものは時代感覚、市場性、志向性など総合的な対応が必要。デッサンは多面的なモノの見方が養われ、肖像画はデッサン力が欠かせない。一途に自分のスタイルを貫く作家が大半である。それがよいのかどうか判らない。私は、自分の好きなことをいろいろトライできたことは幸せである。」と回顧の眼差しでご自分の歴史を語ってくださった。

「美のスタンスには生と死が根底にある」という。東日本大震災後、被災地、宮城県石巻市を訪ねた折、特に印象に残ったのは小雨降る中、男性が住居跡に花鉢を遺族名のイニシャルの形になるように植えていた姿である。まさにレクイエムである。さらに福島の原発事故は悲惨で、その光景にはアーチストである自分達の力の弱さを痛感させられ言葉を失う。この震災の出来事を自然への畏敬の絵画にして展覧会を開きたいと準備にかかっている。作品展の開催が待たれる。

１９６９年6月14日、上田では初めてのインスタレーション・アー

ト「ものと人とのかかわり」の個展を開いた。それは外光を遮断し壁に絵が飾ってない部屋に、吊革をつるした透明のＢＯＸを設置してメッセージを床に置いたアートで、それまでの概念を覆したものであった。来場者はその光景に、「展覧会は終わったのですか？」と真面目に質問してきたそうだ。

肖像画は、それを職業としていた父親と兄から手ほどきを受けた。注文があれば引き受けるが、生存されている方を描くことはあまりない。肖像画を依頼される方が、故人の写真を数枚持ってくる場合がある。どの写真が最も特徴・感じが出ているかを確認するため、生前のエピソードや性格を聞いて思いを膨らませる。人相見ではないので、奥義まで見えるわけではないが、会話の中から人柄が見えてくる。肖像画にして一番美しいのは60歳代から70歳前後。女性の場合、皺の一本も減らすことと線の強弱、色使いに気を配ることでずいぶん印象が変わる。遺族は故人の直近の姿の面影が強いため出来上がった作品を見て「本人と違う」という。そういう場合には「2、3週間ほどご覧ください」と答える。その肖像画に遺族が馴染むための時間が必要なのだ。描きにくいのはご自身の身内や知人。想いが入りすぎて筆が動かなくなることがある、と語る。

ずいぶん前のことだが、ご夫婦の肖像画を依頼されたことがある。そのご主人は杉村さんを奥さんが入院している病院に案内し、杉村さんは奥さんの顔の輪郭を手で辿って描いた。そんなことはめったにあることではないので「ご主人の奥さんに対する深遠な愛を感ぜずにはおられなかった」と語ってくれた。

このように杉村さんの活動は多岐にわたる。

１９８５年から、テレビ信州児童画展の審査を始め、子供たちからパワーをもらっている。６年前からは東御市梅野記念絵画館のボランティア活動をしている。主に小学生との対話型美術鑑賞と描写指導である。「心から感動したものを自由に伸び伸びと自分らしく表現した作品が良い作品だ」と伝えている。

平成25年８月19日訪問

吉池みどり

観点

東京オリンピックと上田

今年７月に日本を訪れた外国人旅行者は１００万３千人で、月間として初めて１００万人を超えた。その２ヵ月後、２０２０年のオリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決まった。

上田のような地方都市にとっても地域経済の活性化への追い風だ。東京や京都を見飽きた外国人旅行者が、次に訪れたいと思うのは日本の地方都市だからだ。日本の美しい四季、農村の風景、安全・安心な食。地方都市には、東京や大阪にはないお宝がたくさん眠っている。

外国人旅行者の第二波到来のチャンスをどう捕らえるか。第一波よりも経済効果は大きいかもしれない。ただし、チャンスは平等ではなく公平であり、単に待っているだけで、チャンスが与えられるものではない。

その地域や地方で、外国人旅行者を本気で受け入れるつもりがあるならば、10 年先を見た種蒔き (受け入れ準備) が必要だ。地域振興に携わる者たちが知恵を集め、構想、企画、実行と頭をひねらなければならない。最後のチャンスになるのかもしれないのだから。

一般財団法人浅間リサーチエクステンションセンター　専務理事
信州大学繊維学部　特任教授・工学博士　岡田基幸

サマルカンド（ウズベキスタン国）のレギスタン広場（日本の地方都市は、このようなアジアの観光名所とも勝負しなければならない。）

ため池の秋

塩田平のため池では、爽やかな風を受けてさざなみが起こり、ススキがたなびく。猛暑の日々、雨乞い祭り、盆踊りも過ぎ去り、季節はめぐる。暮れゆく山並みも、ひとときの静かな秋の装い。

おもしろWeb　メタ検索エンジン

「検索デスク」----- 渡り検索型　http://www.searchdesk.com/

「Ceek.jp 」----- 同時検索型　http://www.ceek.jp/

検索エンジンとしては yahoo! や Google が有名ですが、他にも多数の検索エンジンがあります。複数の検索エンジンを検索するものを「メタ検索エンジン」といいます。
「検索デスク」「Ceek.jp 」はメタ検索エンジンの例です。目的によって使い分けると便利、まずはお試しください。

忘却のえびす講物語

清水 たか子

(3)

昭和22年戦後第1号のえびす講は新趣向の「宝さがしと福引き」でお目見えした。福引きはお買い上げ50円毎に1枚で、初めての試みである。1等は賞金千円、以下5等まで空くじなしとした。長い間の禁欲生活から解放されて、福引きが四万五千枚も出た。翌年、長い間中止していた花火も復活した。戦前と比べれば小規模だが、5寸玉（直径15㎝）7発、4寸玉5発と大星河原の高台から上田の空へ打ち上げられた。多くの人たちは心を揺り動かされ、蘇った平和を噛みしめていた。

昭和24年のえびす講は大雪の中、特等が1万円になった。打ち上げ花火にも力を入れ、一発3万円の2尺玉2発など合計二百二十発を朝6時から夜8時まで断続的に打ち上げた。そして、えびす講の臨時列車を上田から屋代まで運行させるという手を初めて打った。

28年になるとえびす講の折り込み広告が急に盛んになってきた。印刷が容易にできるようになったためである。翌年、長い間親しまれた花火に別れを告げ、千姫と淀君のお籠を先頭に大名行列と銘打って、市内の目抜き通りに繰り出した。初めて実施されたこのアイデアは予想外に人気を博した。観客が出るわ出るわで商店街は黒山の人だかりとなり、衣類などが飛ぶように売れた。この頃養蚕が盛んになり、経済が順調だったこ

えびす講で賑わう商店街　昭和35年頃
「ふるさと上田」　郷土出版社

とも大きな要因だろう。神川・泉田両村の合併を祝して、再度復活させた花火を朝から打ち上げた。

昭和38（１９６３）年以降は会津から温泉芸者を招いて市内をくまなく踊ったり、秩父から屋台ばやしを連れてきたり、東京から新国劇を招いて市民会館落成祝賀をえびす講中心に繰り広げたりした。いずれも成功裡に終わった。

えびす講で飾り付けされた店先
昭和20年代
「ふるさと上田」　郷土出版

昭和43（１９６８）年頃になるとえびす講に陰りが見え始めた。客の出足が悪く、露天商にも客が寄りつかなくなった。一次産業が少なくなってホワイトカラーが多くなり、いつでも必要な時に買物ができるようになったのが原因である。えびす講の魅力は薄らいでしまった。２年後のえびす講を最後に大星河原で花火をする場所がなくなり、仕方なく千曲川河原の中州へ移った。花火を上げるには理想的な高台の大星河原を追われ、常田池の端でしばらくさまよい、上田公園辺りまで放浪してとうとう千曲川に下りて来たのだった。そしていつの間にか伝統あるえびす講の名前が消えていた。

昭和50（１９７５）年代はえびす講から関心が薄らいだ消費者を繋ぎ止めるために、福引き大売り出し等をして客を呼び止めた。しかし昭和61（１９８６）年のえびす講を最後に「上田商工会議所会報」にはえびす講の記録はない。

「信州民報」を調べてみると『平成五年の原町一丁目商店街のえびす大祭の景品はコシヒカリが当たる福引券を贈呈する程度となり、原町のみで行われた』とある。原町の人々は天保９（１８３８）年、今から約百七十五年前に市神社の築造と共に始まったえびす講を忘れずに、今でもえびす大祭として残し、秋に市神社で祈祷し長い間の伝統を守っていることが確認された。

えびす講にも時代と共に栄枯盛衰があり、そして次第に消えていき、今では知っている人が僅かになってしまった。私は先人が感謝の行事として残してくれたこの精神を今の場に生かし、新しい時代にマッチした積極的な発想の展開を期待している。（了）

あとがき

8月3～4日、農文協主催の内山節哲学講座が開かれた。会場は栂池高原、標高1000mの涼しい高原に、北は山形から南は大分まで全国各地から25名ほどが集まった。30～40代の男性が多い中、アメリカ人男性の姿もあった。

5回目となる今年のメーンテーマは「生きる世界の再建のために」。2時間講座4講にわたって、内山講師の柔らかい語りが流れた。

◎ 世界の変動に誰もが影響されるのに、何となく身近に感じられない虚無的関係が拡がっている。
◎ いまは「世界」というと地図上の世界をイメージするが、かつては自分たちが生きた確たる「世界」があった。
◎ 人々は実感できる世界を作りたがっている。積極的なつながりを持ちたいと考える人が増えてきた。
◎ 欧米社会の構成メンバーは生者だけだが、日本社会は自然と死者も加わる。
◎ 自分たちが生きる世界の再建……自然と人間の関係、人間と人間の関係、そこから生まれた文化と歴史との関係、死者（今日の基盤を作った人々）との関係。これらを一体的に統合する多様な関係の世界。

これから世界はどういう方向に向かうのか？　自分の立ち位置は？真摯に模索する質問が相次いだ。「2日間の講義内容を自分なりに咀嚼し、また来年参加したい」という声が印象に残った。それぞれが2日間の内山ワールドを持ち帰り、1年かけて推敲する。（木漏れ日）

KAN
環　千曲川地域の人と文化　　第 12 号　　明浄
2013年 10 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部

表紙及び文中の写真は無断使用を禁じます

環スタッフ：
伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　矢幡正夫　吉池みどり